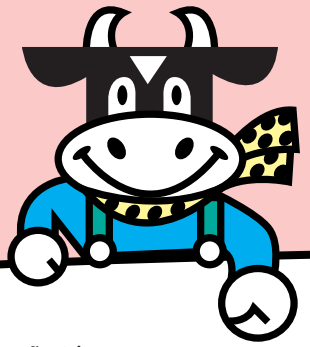


ワンポイント・アドバイス



子牛のためにできること

子牛共済が始まってまだ2年目ですが、年々子牛の診療が増えていると実感します。御存知のように子牛は親牛と違い、油断するとあっという間に調子を崩して死んでしまいます。まるで別の種類の生き物のようです。子牛の事故を少しでも減らすには異常の早期発見と早期治療が基本ですが、ちょっとしたことで事故を少なくすることができます。そこで子牛の管理についていくつか紹介します。

子牛は下痢が始まると、脱水して体が酸性に傾き、吸乳反射が低下します。そうするとさらに脱水が進み眼がくぼんで来ます。体温が低下し始めると危険な状態です。下痢の原因は様々ですが、死亡するのは重度の脱水と低体温によります。下痢のときは脱水が進む前に牛乳や人工乳を中止して電解液をあげてください。牛乳や人工乳は吸収できず、脱水が進んでしまいます。電解液だと水分と塩分を補給できるからです。不幸にも重症になってしまったら、共済に電話して獣医師に診てもらってください。治療は獣医師がしますが、その後の看護もとても重要です。重症例は低体温になっているものが多いので保温をしてやります。保温の方

法は、今は電気ヒーター等の暖房もありますが、簡単なものが「湯たんぼ」です。適当な容器（大きなポリタンクかペットボトル）に熱いお湯を入れ、敷料の中に忍ばせたり、湯たんぼごと子牛に古い毛布やタオルケットを掛けてやると効果があります。これは病気の牛に限らず、冬季に生まれた子牛にも有効です。独房の隅に湯たんぼを置いておくだけで独房全体がほんのりと暖かく、子牛も早く乾きます。しかし子牛に直接触れないように。低温やけど



また、病気を予防するために「すのこ」の利用をお勧めします。地面に直接敷料を入れるのではなく、すのこの上に入れる

と敷料が乾いた状態を維持することができると、子牛の体が濡れにくくなります。それだけでなく、地面から少し隙間

ができることで通気性も良くなり、糞尿から発生するアンモニアガスの影響を少なくできるのです。

「湯たんぼ」も「すのこ」もどちらも手間は掛かりますが、そのひと手間が子牛の事故低減に大きく影響します。残念ながら子牛の価格はどんどん下がっていますが、次の世代を担う牛たちですので、元気に育つように快適な環境を作ってあげてください。

